様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：14301
研究種目：挑戦的萌芽
研究期間：2010～2012
課題番号：22652008

研究課題名（和文）西田哲学・田邊哲学のテキスト生成研究

研究課題名（英文）Text genetics studies of Philosophy of Nishida and Tanabe

研究代表者
林晋（SUSUMU HAYASHI）
京都大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：40156443

研究成果の概要（和文）：田辺元、西田幾多郎の哲学的発展を、最新の人文情報学技術をも用いて解明するとともに、その成果を WEB アーカイブにより広く社会に公開した。特に田辺元の昭和９年の講義録の内容解明に約半世紀後に初めて成功し、「種の論理」発生までの過程が初めて明らかになった。

研究成果の概要（英文）：We explored the developments of philosophy of Hajime Tanabe and Kitaro Nishida partly with the help of digital humanities method. The research results were published through a WEB archive to make it easily accessible to the public. The most important result of the research project is transcription of Hajime Tanabe’s 1934 lecture manuscripts, which had been illegible nearly 50 years. By the transcription, the “genesis” of Tanabe’s Shyu-no-ronri “Logic of Species” was elucidated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010年度	1600000	0	1600000
2011 年度	800000	240000	1040000
2012 年度	200000	60000	260000
年度			
年度			
総　計	2600000	300000	2900000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：京都学派の哲学,ＷＥＢアーカイブ,テキスト生成研究

１．研究開始当初の背景

代表者林は、数年来、人文情報学技術も援用した史料学的手法により、田辺元の主要哲学である「種の論理」の生成過程の史料学的・思想史的研究を行っていた。その研究の対象は、主に、群馬大学および京都大学所蔵の田辺元文庫の手書き史料であった。その難読性ゆえに、林の研究以前には、ほぼ未読だった、 これら史料を林は自身が開発した史料学支援ソフトウェア SMART-GS を活用して、分析しつつあった。

田辺は京都学派 NO２と目されるが、NO1 というべき西田幾多郎の手書き史料も、京都大学文学研究科に多数所蔵されていた。

２．研究の目的

本研究の当初の目的は歴史学における手書き文献研究のために開発された最新情報ツールを利用して， 従来困難と思われていた京都学派の「テキスト生成研究」を本格的に始動させることであった。 具体的には，西田幾多郎と田邊元の手稿や書き入れ蔵書（ 一括して「草稿資料」と呼ぶ） の電子ア

ーカイブを，　京大文学研究科情報・史料学研究室において開発された手書き文献研究用システム SMART-GS を利用して作成し，その手書き文字画像検索機能により、印刷物のみならず手書きの草稿資料も検索できるようにし、そのアーカイブを利用し、『場所的論理』へと至る西田の思想プロセスと，「種の論理」を提唱するに至った田邊の数理哲学・社会哲学・歴史哲学の展開を追跡するというテキスト生成研究を展開する計画であった。

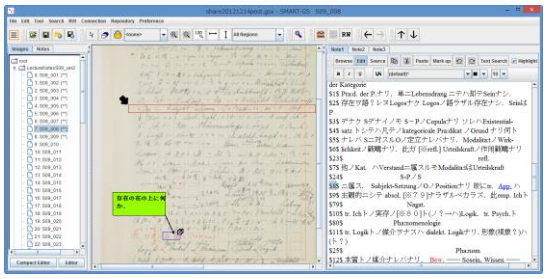
また、これに伴い、WEB アーカイブを作成し、図書館に埋もれ、現実的には一部の研究者の目にしか触れない貴重な史料を、広く一般市民が自由に閲覧できるようにすることも目的であった。

３．研究の方法

田辺元の種の論理の生成過程についての研究は、ほぼ申請当時の計画通り、林がそれまでに作成した史料画像に加えて、林が群馬大学において新たに撮影した画像を、バイトなどを使い、行きりだしの画像処理を行い、この行つき画像史料を SMART-GS を利用して分析するという手法を取った。

その対象は主に、その中で、種の論理が生まれたと考えられてきた「昭和 9 年の特殊講義」の準備メモとした。

また、この分析を、SMART-GS の画像を 2 面のスクリーンに映し出し、京大田辺元史料研究会のメンバーと共同してテキストを分析するという手法をとった。



一方、西田のテキスト生成研究は、予想と異なり、すでに活字化されている史料以外には重要なものが発見できず（当初、石川県西田幾多郎記念館が所蔵していると予想していた文書は調査の結果、別の文書であることが判明した)、また、翻刻も既存の出版物で十分であることが判明した。

その結果、西田資料については、既存の出版テキストの読み込みという従来手法による研究に専念することとし、本研究における特徴の一つである人文情報学技術の利用は、WEB アーカイブによる社会への研究成果の発信を主とすることとした。しかし、西田史料を画像検索可能にするという計画は、市民向け中心となった WEB アーカイブにおいても予定どおり実行することとし、オンラインでは、はこだて未来大学の画像アーカイブを利用して、また、オフラインでは SMART-GS の検索機能を利用して、これを実現した。

西田の研究は藤田が行い、また、出口は、田辺以後の京都学派の哲学者についての研究、たとえば NO3 と目される西谷啓治にその研究目標を定めた。そして、林は田辺研究を専ら担当するとともに、藤田の協力を得て、WED アーカイブの構築も担当した。(実際のアーカイブ・システムの構築は主に外注であり、そのコンテンツを林が藤田の協力を得て作成した)。

４．研究成果

本研究の研究成果は、（１）SMART-GS を利用した、田辺元、種の論理の発生過程の解明、（２）「京都学派アーカイブ」www.kyoto-gakuha.info の開設と、それによる京大文学部所蔵の西田幾多郎史料、および、群馬大田辺元史料の情報発信、（３）従来手法による京都学派の哲学者の研究、の三つの項目に分けられる。このいずれにおいても、多くの成果を上げることができた。以下、三つの項目を、項目ごとに説明する。

（１）この研究の最大の成果は、田辺元没後 50 年解読不可能だった、特殊講義の準備メモの解読に成功し、それにより種の論理発生の初期段階の過程をほぼ明らかにしたことである。現在解読済みの部分は、全体の 20%にも満たない冒頭部分だけであるが、これはほぼ昭和 9 年の講義の夏休み前分にあたり、その中で(A) 雑誌論文③で報告した種の論理を着想した、その瞬間に書いたと思われるメモ、(B) 後のテンソルによる種の構造の分析のもととなると思われるテンソル記号に絶対弁証法を意味する円環を追加した記号を書いたメモ、などの興味深い史料が発見されている。

しかし、学術的に特に興味深いことは、この講義のテーマが、田辺の処女論文でテーマとなった、アロイス・リールの実在論的批判哲学を継ぐものとして田辺が理解した、マックス・シェーラーとニコライ・ハルトマンの哲学を、ハルトマンが主唱した「認識の形而上学」の二つの形態として捉え、その分析を行うことが当初の目的であったことである。先に言及した種の論理誕生時のメモが根拠となり判明することは、田辺の意図が最初から独自の社会哲学、政治哲学を創造することではなく、これらの認識論の検討を通して、その枠組みとして用いられていた伝統的論理学の存在論的枠組み、類種個 (種個全) が、途中から政治的に読まれるようになり、種の論理という社会哲学が成立していることである。

また、この転換の過程で、大きな力となったと思われるのは、シェーラーの哲学、とくに、その知識の社会学などで提唱されたTeilhabe（分有)の思想である。種の論理の第一論文「社会存在の論理」では、田辺は、種の第一モデルともいうべきものを、フランス社会学・社会哲学、のレヴィ・ブリュールの未開社会における認識の研究、いわゆる分有の論理にもとめており、これらをもとにフランス哲学の種の論理に対する影響が議論されることが多かったが、この講義録の記載と、同時期の日記の記載により、実は、田辺は、最初シェーラーのTeilhabe（これも分有と訳される）の知識社会学に注目し、次に、レヴィ・ブリュールの分有の論理が、これと同じものであることを確認していることが判明した。

シェーラーは哲学的人間学の主要な研究者でもあり、種の論理の背景に、当時の、人間学、特に身体論があることを主張する最近の竹花などの研究に、この事実は符合し、種の論理成立において、従来は、ほどんと注目されることがなかったシェーラーの哲学の種の論理への大きな影響が理解されることとなった。

また、これに伴いシェーラーとともに、シェーラーとの影響関係が強調されるハイデガーの哲学の種の論理発生への「背景的影響」も、昭和９年特殊講義のメモの分析により明らかになった。

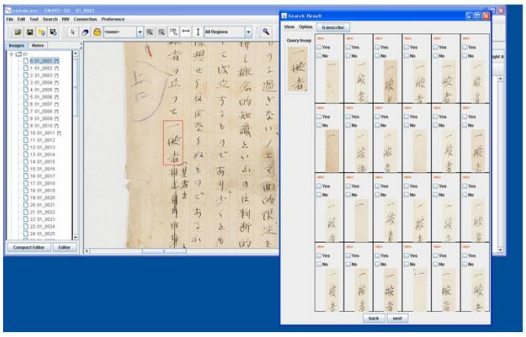
これらの史料研究をきっかけとして、従来の公刊論文の研究の再検討により、林は、従来の田辺理解、特に種の論理理解に反して、この社会哲学に対して、ヘルマン・コーエンの哲学に見られるような、数学の哲学の哲学一般に対する影響など、従来はドイツ留学を期にその影響圏を脱したとされていた新カント派の強い影響が、田辺の生涯を通して、残っていることがわかった。これらの研究により、田辺哲学の位置づけは従来のものから大きく異なるものとなった。それらを報告したものが雑誌論文の②③⑤、学会発表の③である。

（２）この項目の研究では、京大文学研究科所蔵の西田幾多郎文庫に収蔵されている総数五千枚近い、雑誌論文手書き原稿、書籍化の際のゲラ刷りへの修正などの、西田幾多郎の手書き史料をすべて画像化し、林が従来作成して来た田辺元史料の画像史料とともに、ＷＥＢアーカイブ、京都学派アーカイブ www.kyoto-gakuha.info として公開した。

ただし、田辺史料は没後からの時間経過などを考慮して、公開は各資料の一部として、史料全体の提供は研究者が希望するときに個別に対応することとした。

このアーカイブのトップページの画像を次に示す：

また、はこだて未来大学、寺沢准教授の協力により、西田史料は各資料単位で、オンラインで画像検索が可能である。また、データをダウンロードすれば、SMART-GS により、全画像を一度に検索することも可能にした。次の示すものは、その内、後者の SMART-GS による全西田史料の一例（「一般者」を、全史料から検索）である。



この研究成果は西田哲学に興味をもつ研究者はもとより、電子アーカイブの関係者、さらには一般からの反響が大きく、新聞発表したところ、全国紙すべてと共同通信、また、The Japan Times に掲載された。

本研究の特徴の一つは、人文情報学の最新技術を京都学派研究という日本思想史の研究に適用して、従来、不可能だった、あるいは、難しかったことを可能にすることだった。ここまで（1、２）で述べて来たように、その目的は十分に達成できた。この成功の原因の一つは史料研究が難しい現代史に京都学派の歴史が属していることがあげられるだろう。現代にいたるほど、史料の数は大きく、また、各資料は難読になる傾向が知られている（崩し字を正確に書く習慣が廃れるためと考えられる)。本研究により、今後、人文情報技術が京都学派の研究たとえば、西谷、九鬼などのアーカイブ研究に大きな力となる可能性が高いことが実証されたといえる。

（３）以上は、人文情報学技術という新しい手法による研究の成果であるが、もちろん、これらの研究も、その研究時間の多くの部分は従来通りのテキストの読み込みと、その理解・分析という、従来の人文学の研究手法で

行われていることはもちろんである。これを機械化できるとは思えない。本研究では、王道とでもいうべき、従来手法の研究も行った。林の田辺研究の大半も、従来研究手法によるものであり、それでは実現できないか困難な部分が情報技術で補われたのである。

西田研究については、（２）の社会への情報発信という目的以外では、この様な情報技術と従来手法の融合は行われなかったが、西田哲学・田辺哲学の生成過程の研究という、本来の人文学的研究の目的に対しては、出版されたテキストの詳細な分析により、藤田により大きな成果が得られた。従来、西田哲学に比べて田辺哲学は、その風下に置かれ西田から田辺への影響のみが声高に語られ続けていたが、藤田は綿密な西田・田辺の出版物の分析により、西田哲学の成立、特に中期以後のそれに田辺の影響が強くみられることを実証した。その成果は、学会発表②において発表されたが、これも従来の京都学派観を覆す、本研究の大きな成果である。

また、西田哲学の成立過程の資料からの分析を担当する予定だった出口は、京都学派の後の世代の思想家たちの研究を行うことになり、雑誌論文④、学会発表①などの成果を得て、今後京都学派アーカイブを、京都学派全体に広げていく際の準備となる研究である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 出口康男、空の思想のロゴス：西谷啓治「空と即」再訪、理想社雑誌「理想」、No.689、2012 年 10 月、pp.144-160、査読無
② 林晋、澤口昭聿・中沢新一の多様体哲学について　―田辺哲学テキスト生成研究の試み（二）―　京都大学文学部、日本哲学史研究室紀要「日本哲学史研究」, 第７号, 2012 年９月.、査読無
③ 林晋、田辺元の『数理哲学』、岩波書店雑誌「思想」、No.1053、2012 年１月、pp.197-216、査読無
④ 林晋、情報の宝庫　-二つの田辺文庫－、「波書店雑誌「思想」2012 年 1 月、No.1053、2012 年 1 月、pp.303-306、査読無
⑤ 林晋、「数理哲学」としての種の論理―田辺哲学テキスト生成研究の試み（一）―　京都大学文学部、日本哲学史研究室紀要「日本哲学史研究」, 第７号, 2010 年９月、査読無

〔学会発表〕（計２件）

① Yasuo Deguchi, Masakazu Nakai and Archibald MacLeish, 2012.10.13, Japan Studies Association of Canada, Carton University, Ottawa, Canada.
② 藤田正勝、「田辺元の生涯と思想――田辺元先生没後五十年を記念して――」、2012 年度　西田・田辺記念講演会 2012.06.02, 京都大学
③ 林晋、種の論理再考―数理思想史の観点から、2011 年度　西田・田辺記念講演会 2011.06.04, 京都大学

〔図書〕（計０件）
該当なし

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

該当なし

○取得状況（計０件）

該当なし

〔その他〕
ホームページ等

京都学派アーカイブ
http://www.kyoto-gakuha.info

６．研究組織
(1)研究代表者
林晋（SUSUMU HAYASHI）
京都大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：40156443

(2)研究分担者
藤田正勝（FUJITA MASAKATU）
京都大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：90165390

出口康夫（DEGUTI YASUO）
京都大学大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20314073

(3)連携研究者
なし